

05号の制作に関わったクリエイターと、enocoスタッフによるカフェトーク。
今回の表紙撮影は、enocoを飛び出し、大阪府交野市でのロケとなりました。

ゲスト 有本真紀さん フォトグラファー
イガキアキコさん デザイナー



イガキアキコ

音楽家・デザイナー。グラフィック・ウェブデザインと平行してCMや映像作品、ダンス、演劇などあらゆる分野への楽曲提供やアーティストサポート・即興演奏を行うなど、モノヅクリに境界を持たない活動をしている。 igakiakiko.net

有本真紀

フォトグラファー。京都を拠点にフリーランスで活動。光陰で描く情景スケッチのような写真を目指す。時々ピンホール写真を楽しんでいる。 <http://arimotomaki.com/>

—— 今回、ニュースレターの取材では初の遠出でした。
有本 すごくいいところで、楽しかったです。リスがいたり、巨大な松ぼっくりが落ちていたり…。また季節がいいときに改めて行きたいですね。
—— 春発行の今号ですが、撮影は極寒の2月でしたもんね！
有本 広告でも雑誌でも、実際に写真を見て頂く時期より早く撮影するので、先の季節を演出したり、撮影当日の気候を感じさせないように工夫する事はよくあります。
—— ところでイガキさんは音楽活動もされているそうですが、デザイナー業との両立は難しいんですか？
イガキ オリジナルで何かつくるとなると別かなとは思いますが、例えばCMなどのための音楽を制作したりするときと、グラフィックデザインをしているときとほとんど同じ感覚なので、自分の中ではあまり境目はありません。なにかを作りたい人がいて、それに合うものを一緒にアウトプットするという作業なので。表現方法は違えど、同じことだなと考えています。

ninOval cafe

enoco地下1階 営業時間：11:00—18:30（月曜日定休）

行列のパンケーキカフェ、阿波座新店舗7月7日オープン！

暑くなる季節に甘酸っぱいベリー＆カシスソースのふわふわパンケーキはいかがですか。おかげさまでご好評につき、週末は行列が長くなりご迷惑をおかけしていますが、新店舗を阿波座駅4番出口近くに7月7日オープン予定です。ご期待ください。



enokojima creates osaka
enoco

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]
Enokojima Art, Culture and Creative Center,
Osaka Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指し2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業を行うほか、企画展や公演、セミナー・ワークショップなどを開催し、クリエイティブな人や情報が行き交うプラットフォームとなることを目指しています。

〒550-0006 大阪市西区江之子島2丁目1番34号

開館時間：10:00～21:00（ただし展示室は11:00～19:00・日曜日は11:00～16:00）

月曜・年末年始休館

電話 06-6441-8050 | FAX: 06-6441-8151

メール art@enokojima-art.jp

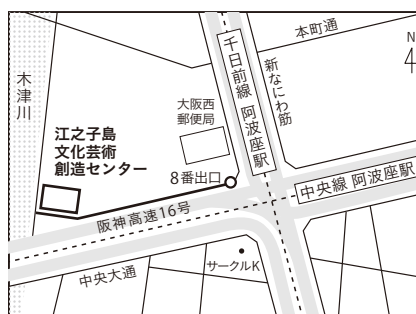
www.enokojima-art.jp

enocoニュースレター 05

2015年4月発行

「enocoニュースレター」は、enocoが年4回発行する情報誌。enocoで起こっていることや、enocoにかかわる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。

発行 | 大阪府立江之子島文化芸術創造センター | 編集 | 峯恵子 (enoco 企画部門)
表紙・特集ページデザイン | イガキアキコ | 撮影 | 有本真紀 (表紙、p.2-p.5)
アートディレクション | 後藤哲也 (000 Projects)
イラスト (エノケン、似顔絵) | タダユキヒロ



[アクセス]

大阪市営地下鉄千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。

写真 有本真紀
デザイン イガキアキコ

江之子島文化芸術創造センター enoco お送りする「enoco ニュースレター」。表紙と巻頭は、毎月異なる関西のクリエイターたちが担当します。
enoco プラットフォーム事業の仕事をご紹介します 05号では、大阪市立大学理学部附属植物園にお邪魔し、「かたのキャンパス」チームにお話を伺いました。女性クリエイター2人の手による表紙は、被写体のみなさんの個性とも相まって、とても和やかな雰囲気。芝生に点々と置かれた青い大きなバケツでは、蓮を育てているそうです。

www.enokojima-art.jp





左から 河合裕子(かたのキャンバス 2014 総合リーダー)、牧野由起子(かたのキャンバス 2014 オリジナルカラーチームサブリーダー)、谷井育子(かたのキャンバス 2014 オリジナルカラーチーム・リーダー)、濱本庄太郎(enoco プラットフォーム部門)、甲斐健(クリエイティブディレクター／交野おりひめ大学プロデューサー)、田中健介(交野おりひめ大学 おさけ学科リーダー)、西元靖志(公立大学法人 大阪市立大学 理学部附属植物園)、佐々木隆志(公立大学法人 大阪市立大学 理学部附属植物園)、石塚育代(enoco プラットフォーム部門) ※敬称略

公共空間の利活用、地域の活性化、まちづくりなど、単独の部局だけでは解決が困難な複合的な行政課題 に対して、アーティストやデザイナー、府民、専門家などの多様な立場の組織や人が“プラットフォーム”を形成し、行政主導ではなく対等な立場で交流・対話を行い、アートやデザイン等をツールとして解決策を検討し提案する官民共同の体制づくりを支援する「enoco プラットフォーム形成支援事業」。

公共空間を活用する「おおさかキャンバス推進事業」や様々な地域での取り組みへのサポートを通して蓄積してきた公共空間活用のノウハウや理念を活かすことや、府内市町村における地域課題への取り組みを、アートやデザインを活用して技術的に支援することを目的として始まったのが、「わがまちカンヴァス」です。

その中の取り組みのひとつ、2013 年から大阪府交野市で開催されている「かたのキャンバス」について、お話を伺いました。



おおさか し りつ だいがく り がく ぶ ふ ぞくしよくぶつえん
大阪市立大学理学部附属植物園

昭和 25 年に大阪市立大学理工学部附属の研究施設として発足し、植物学の基礎研究の対象として多くの植物の収集と保存に努めている施設。なかでも日本産樹木の収集に力を注ぎ、野外で生育可能な約 450 種を植栽し、もってわが国の代表的な 11 種類の森の型（樹林型）を復元するほか学問的に重要な外国産樹木や花木、草本類などの展示も行う。

また、大学の研究の場であるだけでなく、自然学習や生涯学習の拠点として広く一般にも公開されています。

「かたのキャンバス」とは？

甲斐 健（クリエイティブディレクター／交野おりひめ大学プロデューサー） 僕は交野出身なのですが、45歳のときに中学校の卒業 30周年の同窓会を開きました。それまで東京に 20年以上いて、交野に戻って1年目くらいの時なのですが、そのときに同級生たちと「何か地元役に立つようなことをやってみたいよね」という話になったんです。ちょうど市長さんにお会いする機会に恵まれて、実現につながっていったんです。よく見渡してみると交野って、一見何も起こっていないような静かなまちに見えて、実は本当にいろんな市民の方が個人とか団体でいろんな活動をされているんです。これから色々な人と協力してまちおこしなんかをやっていこうと考えたときに、市民大学というような、地域の垣根を超えているんな人が集まりやすい大きなチームという組織ができるといいなというアイデアが浮かび、そこから自分なりに勉強して、色々な地域活性化の事例や、各地の市民大学のいいところを取りを目指しました。ただ今までは市民大学といえば、英会話とかフラダンスとか、そういうものが多かったんですが、僕たちは交野らしさの再発見や交野の活性化を目指して活動して、まちも人も両方元気になるというようなものを目指したかった。それで立ち上げたのが「交野おりひめ大学」でした。まずは交野の水を活かしてそばを育てる「そば学科」から始めて、特産品をみんなで企画開発する「きかく学科」や、郵便局と提携しての「えてがみ学科」、お酒の醸造についての座学と体験のできる「おさけ学科」など、交野の魅力を再発見して発信するためのさまざまな活動に取り組んでいます。そのおりひめ大学の中の「森のあーと学科」が開催するアートイベントが「かたのキャンバス」です。大阪市立大学理学部附属植物園を舞台に「森」「食」「農」など、交野の資源や魅力をアートの力で発信するというもので、オリジナルのピザ釜をつくって交野の食材をつかったピザを焼いてふるまったり、アート作品の設置や音楽パフォーマンス、マルシェなども開催し、2014年には約3,000人の来場がありました。



地域の資源としての公共施設と、市民の関わり

甲斐 植物園を会場として使いたいという声は、メンバーの中からたくさん出ていました。この植物園というのは交野の大きな資源で、ご覧のとおりすごく美しいロケーションで、交野の自然、環境を代表しているような場所です。地域のいろいろな方々と連携しながら交野を盛り上げたいと考えたときに、ぜひとも植物園で何かやらせていただきたいと全員一致で決まりました。ただあくまで大阪市の大学施設なので、イベント開催などはなかなか難しいところもあるんですけども、わがまを言わせてもらって、たくさん協力していただきました。



佐々木 隆志（公立大学法人大阪市立大学 理学部附属植物園）

この植物園は一般開園も行なっていますが基本的には大阪市立大学の教育・研究施設です。

大阪市立大学では「地域社会に開かれた大学」を目指す活動を行なっており、当植物園に

おいても近年、地域貢献活動を積極的に行なっています。たとえば「枝垂桜のライトアップ」（夜間特別開園）や、地域のお祭イベントへの協力（七夕）などです。そんななか、交野市・おりひめ大学さんから「かたのキャンバス」開催のお話があり、地域貢献の一環としてご協力させていただくことになりました。

ここ数年は植物園を会場にしたイベントが増えていますが、なかでも「七夕」と「かたのキャンバス」は規模も大きく、植物園としても大きなイベントの企画・運営を経験させていただいています。

また、「お祭り」的なイベントだけでなく、教育・研究施設として開催すべき企画に意識的に取り組んでおり、市民の皆さんに植物園を生涯学習の場として活用していただけるよう努力しています。大阪市立大学の施設ですので、大阪市はもちろん、交野市をはじめ所在地である北河内地域での認知度を上げ、有効活用していただけるように努力が必要だと感じています。「かたのキャンバス」はよい成功事例として、応用と活用を進めていければと思います。

甲斐 健（かい たけし）

クリエイティブディレクター／交野おりひめ大学プロデューサー

1989 年より広告会社に勤務、1998 年に退社しフリーランスとなる。広告会社勤務時代にカルビー「じゃがりこ」の商品開発に携わったほか、ネーミングを含む商品開発からグラフィックのコピー、テレビ CM の企画、広告キャンペーン全体のディレクションまで幅広く手がけている。交野市在住。

プラットフォーム部門の役割とは？

濱本 庄太郎（enoco プラットフォーム部門 ディレクター）

ではプラットフォーム部門の仕事はいったい何なのかということについてなんですが、実は今回の交野の事例に関して、僕は何もしていないと言っても過言ではないんです。これまでさまざまな地域でたくさんの事業や企画のお手伝いをさせていただきましたが、通常は、やりたいことが決まっていて、それに向かってステップを踏んで行く中で、何が足りないのかというのを客観的に見た上でアドバイスをさせていただくという形を取ります。今回はほぼ足りていないものはないように思えましたので、もう勇気づけるというか、「これで行けると思います！」という後押しをただけという…僕らが活躍しなくていいということは、うまく行っているということでもあるんですよ。

甲斐 いやいやいや…！何もかも初めて体験することなので、イベントの組み立て方からスケジュール感まで、全然わからない状態でした。一番心配だったのは、サポーターとして集まっていた市民のみなさんが、どうすれば丸となることできて、段階を踏んで実現まで進むことができるのかということでした。僕らみたいな地方の小さなまちでは、地域のお祭にしてもだいたいいつも同じような人たちが運営に関わっていて、新しい意見が入らなかったり、同じようなことをやっていたりするので、そうならないためにはどうすればいいかということを知りたかったんです。

濱本 何もなかったとは言いつつ、具体的にアドバイスをさせていただいたことが2つだけあります。1つめは、単発で終わってしまうイベントではなくて、継続して根付いていく可能性のある新しい市民のお祭を作ろうということ。2つめはチームビルディングをきちんとしようということです。チームづくりについては、もちろん上手くいくところとそうでないところがあります。成否を分けるのはやっぱりリーダーになることのできる方がいらっしゃるからじゃないかということになるのですが、交野には凄くやる気に満ちあふれていて、メンバーとの関係づくりの上手なリーダーがいらっちゃって、しかもその方々の特技が見えていた。リーダーの特技を活かす形でチームづくりをすすめ、お祭づくりに展開すれば、必ず成功すると確信しました。

甲斐 いや、ほめ過ぎだと思います。でも例えばビザ釜を作る、なんていう特殊な技能がある方や、学生の頃に子どもたちを相手にボーイスカウトみたいな活動をされていた方が中心になっておもてなしチームを作ったり、アドバイスをいただきながらそれぞれのスキルの配置は上手くできたんじゃないかと思っています。

そして、「新しいお祭」ということに関しては、僕たちのそういう意識が新しいムーブメントとして地域にも認められたんじゃないかなと思うんです。その新しいムーブメントに、学生も含めて若い人たちがすごく関わってくれたという構造になったんじゃないかなと思っています。交野の魅力を表現してくれる場所が出来るんじゃないかなってという期待感がみんなの中になんとなく生まれていって、どんどん参加するサポーターの方の数が雪だるま式にふくれあがったという印象を受けています。はじめ70名くらいから始まって、最終的には200人、300人と増えていきました。

西元靖志（公立大学法人 大阪市立大学 理学部附属植物園）

交野市民の方は特にボランティア精神がすごく強く

て、責任感もあってやり遂げるという人が多いように感じます。一度やってみて良いと感じたら、次年度もまた継続して参加して下さるように思います。

甲斐 まず、実際に関わっている人に誘われて参加してみた、というのが参加理由として圧倒的に多いということが大きいような気がしています。みんながやりがいを見つけてくれて、楽しんでくれて、楽しいことは皆に伝えたい…というふうにいい連鎖ができていたんだと思います。1年目は、3ヶ月間の準備期間の中でのペース配分も全然分からなくて最初からずっと飛ばしていたので、終わってから1ヶ月くらいの間、みんな放心状態で使いものにならなかったんですよ。2回目は、1回目で濱本さんたちに教えてもらいながら得たノウハウがあるし、ある程度植物園さんともコミュニケーションが取れるところから始まっているし、場所のこともある程度分かっているし、このくらいのペースで進めて行けばいいかということも1回目に学習できたので、まあ2回目もしんどのいはしんどかったですけども、だいぶ進歩がありました。何より、2回目もやろうと思って参加していただいたことが嬉しかったですね。

西元 「かたのキャンパス」に参加した小学生が職場体験の場所として植物園を希望してくれたり、サポートスタッフの方同士がご結婚されたりなど、植物園と地域のみなさんとのつながりも強くなっているように感じます。



人がまちをつくる

甲斐 この「かたのキャンパス」の取り組みの中で、一番大事にしているのは、一人一人が主役になれる状況をつくるということです。サポーターの皆さんには本当に色々な方がいらっちゃって、本当に下は幼稚園児から上は70代、80代の方まで。参加の動機もさまざまで、本当に濱本さんや僕よりもリーダー、リーダーよりもサポーターのみなさんがいきいきと、自分ごとと感じて活動してくださっているのが一番大事だと思っています。

濱本 イベントを作るために動くのではなくて、みなさんが日常的にやっていることを皆に見せてあげたりとか、それぞれの発表を集めるとイベントになる、というものを作りたいですね。イベントのためだけに動くというのはしんどいし、地域にとってはあまり意味がないと思うので、日常を寄せればお祭になるというのが理想の形なんだと思います。あと大切なのは世代交代ができるということです。やっぱりずっとやっていくとしんどくなると思うんですよ。さすがの甲斐さんも(笑)。だから一人一人が主役になっているというのは、すごく世代交代がしやすい状況だと思います。次に誰がリーダーになっても担っていくという素地があるというのか。もちろん交野の地域性というのもあると思いますが。

各地で行われている「わがまちキャンパス」

enoco が各市町村の担当課と協同で実施しています。



- 奥河内 100 人会議

(2014年、河内長野市 都市創生課)

奥河内に想いを持つ方々にお集まり頂き、「遊び」をキーワードに奥河内の資源や魅力を活かした新しいプロジェクトを考えるワークショップを開催。「かわちながの世界民族音楽祭」との連携プログラムを実施。

- KOTATSU PICNIC 大阪市

(2014年、大阪市 住吉区役所教育文化課)

住吉区とゆかりのあるさまざまな国や文化の方々との交流の機会をはかり、相互理解を深めるべく住吉区役所の中庭に用意した超長いコタツでピクニックを開催。

- せんなんキャンパス

(2013年～、泉南市 教育委員会生涯学習課 / 埋蔵文化財センター)

泉南市の文化財（レンガ等）の新しい活用方法の創造や、地域で活動する団体・人の掘り起こしを通して、センターの活性化や地域の魅力づくりを行う。

- 高槻アート博覧会

(2013年～、高槻市 産業振興課 高槻アート博覧会実行委員会)

13年続く「高槻アート博覧会」の実行委員会メンバーとのワークショップを通して、コンセプトや目標の明確化を図り、今後の更なる発展と継続的な運営に向けた方向性を検討する。

- かたのキャンパス

(2013 年～、交野市 行政経営室 交野おりひめ大学)

詳しい情報については、enoco プラットフォーム形成支援事業ページをご覧ください。

<http://www.enokojima-art.jp/platform/>



かたのキャンパス 2013 の様子





これからのイベント情報

大阪府20世紀美術コレクション展 マイク・カネミツ／金光松美 ー ふたつの居場所



金光松美《変わりやすい風》
1979年 アクリル、キャンバス

金光松美(かねみつ・まつみ／1922-1992)は、1950年代以降の抽象表現主義を牽引した旗手の一人としてニューヨークで活躍した日系人画家です。戦後、金光はニューヨークの美術学校アート・スチューデント・リーグでハリー・スタインバーグ、国吉康雄らに学び、また、ジャクソン・ポロック、ウィレム・デ・クーニング、フランツ・クラインらと交友を深めました。国吉の死後、かねてから付き合いのあったニューヨーク・スクールの仲間と同様に抽象表現主義の作品を手がけるようになり、抽象表現主義の旗手の一人として認められ、ニューヨーク・スクールの日本人画家として人気を博しました。1965年にはロサンゼルスへ移住し、教鞭をとりながら、晩年は太平洋や気象をテーマとした色彩豊かな作品を数多く残しました。本展では、アメリカ、日本の二つの祖国をもちながら、絵を描き続けることで自分の居場所を作り出し、時代を生き抜いた画家 金光松美の作品およそ40点を、その生涯をたどりながらご覧いただきます。

ー

| 展覧会 |

会期：2015年4月24日(金)～5月16日(土)※月曜休館
開館時間：11:00～19:00
会場：4階ルーム1(入場無料)

| ギャラリートーク |

4月29日(祝・水)14:00～15:00(参加費無料・予約不要)

作品写真にまつわる「？」を解決します！ enoco WORKSHOPLABO. 作品写真の撮り方



日々、ギャラリーやアトリエ、または職場などで、作品や展示風景、イベント記録などを撮ってはいるものの、とりあえずオートモードにしていたり、後で編集すればいいやと放っておいたり、むやみやたらと沢山撮ってみたり、でもいざ使いたい時には良い写真がない！と焦ったり…。あなたは思い当たる節ありませんか？

そんな作品写真にまつわる「？」を解決します。

今回は、美術作品や建築の写真を撮影している表恒匡氏

を講師にお招きし、これだけ覚えればOK！カメラの使い方の基本から、さまざまな状況にも対応できるマル秘テクニクまで、じっくりみっちり教えてもらいましょう。ワークショップ後には見違える一枚が撮れるようになっているかも！？

ー

開催日時：2015年5月9日(土)11:00～16:00

募集人数：15名(申込み先着順)

参加料：2500円

会場：4階ライブラリーほか

当日ご用意いただくもの：カメラ、受講料

講師：表恒匡(おもてのぶただ)

京都市在住。2009年より美術作品(絵画、彫刻、陶芸、映像、パフォーマンスアート、また展覧会のインスタレーションビュー)、建築の写真撮影業。名和晃平主宰の

SANDWICHの記録撮影として携わる。

<http://www.omotenobutada-photography.jp>

記念すべき第1回は古本！！ えのこ de マルシェ



イラスト：井上雄太

2015年春から新たに、enocoの玄関広場でマルシェをはじめます。名付けて「えのこ de マルシェ」。enocoとクリエイターによる共同企画によるこのマルシェは、回ごとに取り扱うテーマや商品とマルシェ空間がガラッと変化します。年に4回実施の予定です。記念すべき第1回目は、enoco地下1階に入居しているアート・デザイン・サブカルチャーを取り扱う古本屋ON THE BOOKSとの共同企画。テーマは「古本」です。出店予定の古本屋は、大阪・京都・神戸の関西圏から大集合。取り扱う古本のジャンルは、文学・アートブック・古い映画のパンフレット、店長達による特選雑本(漫画やサブカル、乙女本など)や雑貨などが勢ぞろいします。美味しいフードやコーヒーの出店も予定しています。

ー

開催日時：2015年5月16日(土)11:00～18:00

会場：江之子島文化芸術創造センター[enoco]玄関広場

| 出店店舗 |

トンカ書店(神戸)、古書ダンデライオン(京都)、本は人生のおやつです(大阪)、FOLK old book store(大阪)、駒鳥文庫(大阪)、ON THE BOOKS(大阪)、Ryan Cecil Smith(zine)、YYWILLIAMS(布小物)、KIMURA KOTARO(イラスト)、GHOST DEBRIS(布小物)、花雷(アジアンフード)、アート&ハコ。(カフェ、雑貨)、African Gazelle(アフリカンファッション雑貨)、ハッピー☆ビーズ(ビーズアクセサリー)、Lotus(FIMO粘土のアクセサリー)、Krtec(ポップNUNOザッカ)、Canna(色々素材のカラフルアクセサリー)、THE SOCKS(くつ下)、MAGi(アクセサリー)、Daystarter(グッズ)、and more…

各イベントの詳細・申し込み方法はホームページをご覧ください。

大人も子どもも、みんなで作る映画館！？ えのこじま映画館(仮)制作ワークショップ 参加者募集



夏休みにだけ現れる映画館「えのこじま映画館プロジェクト(仮)」がスタートします。真っ白なギャラリー空間の中に、建築系クリエイターとワークショップ参加者の皆さんと一緒に考えた仮設の映画館をつくります。また、映画館の中で上映する映像作品やプログラムを、参加者のみなさんと一緒に考え、会期後半には映画祭を開催予定です。会期中には、映画に関する様々なイベントや映画作りのワークショップも開催予定です。今年の夏休みは、毎日変化する「えのこじま映画館」に遊びに来て、一緒に作って観て考えてみませんか？

ー

| 募集情報 |

映画館を作りたい人、上映する映画やプログラムを考えてみたい人を募集します。

募集人数：各10名(予定)

募集締め切り：5月中旬

| 活動期間 |

1) キックオフワークショップ：6月初旬
2) 映画館づくり：8月1日(土)～7日(金)※月曜休
3) 映画祭づくり：8月1日(土)～23日(日)※月曜休
※実施日や応募方法などの詳細は、随時ウェブサイトにてお知らせします。

| えのこじま映画館(仮) |

会期：2015年8月1日(土)～30日(日)※月曜休館

エキシビジョンカレンダー

2015 年 4 月 - 6 月

月	会期	展覧会名	ルーム
4	- 4日(土)	眼と心とかたち 「学芸員N」が出会った大阪府20世紀美術コレクション	[ルーム1,2,3]
	7日(火) - 12日(日)	府美協春季展	[ルーム1]
	7日(火) - 19日(日)	カйнаオト個展Ⅰ	[ルーム3]
	7日(火) - 12日(日)	第26回 蒼穹会	[ルーム4]
	14日(火) - 19日(日)	ぎんなん会 (大阪府友会)	[ルーム1]
	14日(火) - 19日(日)	Phat PHOTO 写真教室 卒業作品展	[ルーム4]
	21日(火) - 5/3日(日)	カйнаオト個展Ⅱ	[ルーム3]
5	21日(火) - 26日(日)	第86回 「浪展」	[ルーム4]
	24日(金) - 5/16日(土)	大阪府20世紀美術コレクション マイク・カネミツ／金光松美 - ふたつの居場所	[ルーム1,2,3]
	28日(火) - 5/3日(日)	土筆会展	[ルーム4]
6	12日(火) - 17日(日)	東南亜細亜 人・人・人展	[ルーム4]
	19日(火) - 24日(日)	20周年記念アートムーブコンクール	[ルーム1,2,3,4]
	26日(火) - 31日(日)	京都造形芸術大学大阪クラブOBG会絵画展	[ルーム1,2,3,4]
	2日(火) - 7日(日)	関西一創会展	[ルーム4]
6	9日(火) - 14日(日)	第四回西日本創作表装展	[ルーム1]
	23日(火) - 28日(日)	安起瑩「ハングル文様デザイン」展	[ルーム2]
	24日(火) - 29日(日)	アトリエワンダーランド展	[ルーム4]

くわしくはホームページをご覧ください <http://www.enokojima-art.jp/>

展覧会 & イベントレビュー

enoco [study?] #2 展覧会

堀川すなお 解釈と行為 SEEING AND PRACTICING

(2015年1月10日～1月24日)

巨大な作品、壁を埋め尽くす数の絵画や床に溢れるオブジェいった、見る者を圧倒する展示がある。そのとき心に聞こえてくる音はどんなものだろうか。鬼気迫る激情を訴える展示なら、大瀑布や荒波のような音かもしれない。一方で、群衆が一斉に囁いているような、または枯葉を踏んで歩くような、ひそやかだが複雑な音のこともあるだろう。enoco[study?] #2における堀川すなおの展示は、まさに後者の典型であった。

壁一面に貼られた数多くの「作品」は、そのほとんどが青色鉛筆による精緻な線描で、離れて見ると青い薄靄のようにも、細かく青い壁のヒビのようにも見える。作品の多くは、作家が独力で制作したものではなく、ワークショップや対話と言った他者とのコミュニケーションの中で制作されたものである。

堀川すなおは「目の前にあるものを見て理解する」という、日常的で無意識的な行為に意識を向け、そのものの「本来の姿」について探求する。哲学的と言えるその探求は、しかし言葉だけではなく、科学のように実験、観察、そして描画と、手と目を介して行われる。

これまで主に一人で探求を積み重ねてきた堀川が、やがて他者(の認識)とへと意識を向けるのは当然の成り行きであり、「他者に対してひらいていくこと」で「アートの可能性」を研究(study)する本プログラムは、まさに渡りに船だったようだ。

プログラムではアトリエ公開やワークショップが行われたが、アトリエ公開は単なる中間発表ではなく、訪問者と対話し、時には簡単なワークショップを行う研究の場として機能していた。ワークショップに至っては、ワークショップとは何か、リサーチするところから始めている。これら他者の介在する制作に共通しているのは、対象物について、言葉による外見の「説明」、ものを見て得られる「視覚情報」、その「名称」の3つのうち、1つあるいは2つの情報だけで制作が行われる点である。例えばホッチキスを描くのに、形のみを説明した言葉をもとに描く場合と、その説明にホッチキスであるという情報を加えて描く場合、直接目で見て描く場合の3つが対比される。こうして得られた数多くの描画は、もはや作家個人の作品ではなく、また、作品というよりむしろ実験結果というべきものである。

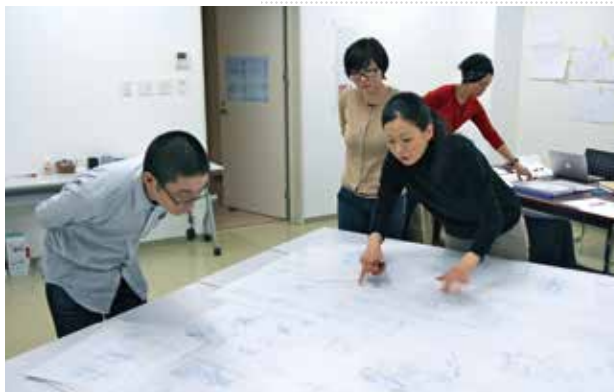
しかし、それらを一堂に並べた成果展を見れば、作家の探求に対する答えが得られるわけではない。むしろ作家の問いは、他者の介在でより深く複雑なものになっている。研究(study)することによって問い(=?)が深まるというのは、[study?] というタイトルに対して出来過ぎの感があるが、丁寧に個々の作品を見ていけば、この問いが知的な楽しみに満ちたものであることに気がつくはずだ。



展覧会風景
photo:Takuma Uematsu



展覧会風景
photo:Takuma Uematsu



アトリエ公開・中間レビューの様子
(2014年11月29日)



これまでのイベント

MuDA Exhibition (2015年1月10日～1月24日)



photo: Takuma Uematsu



photo: Koji Tsujimura

ダンサー、音楽家、美術家など様々なジャンルのアーティストが集まるハイパーパフォーマンスグループMuDA。通常、京都を拠点に国内、海外での公演を活動の中心に据えている彼らが、展示空間というホワイトキューブ(何もない空間ゆえの可変性と柔軟性を特徴とする空間)で展示形式をとるという試みは、一体何が提示されるか未知数でありMuDAとenoco双方にとって実験的なものでした。Think(思う), Repeat(繰り返す), Progress(進歩、発達、発展)の3つのスペースからなる展示室では、彼らが繰り返し用いているスタイルである、肉体を酷使する衝突行為と反復行為、生命や宇宙といった普遍に向かう意思を綴った語り、公演ごとに異なったメディアを使用する(彼らにとっては実験でもある)映像作品と、展示空間に響き渡る音響(衝突音と語り)により、彼らの公演を追体験する錯覚に陥るような構成となりました。また、会期中盤には展示空間内の非常に狭い通路を舞台空間に転換し、30名限定観覧のパフォーマンスを実施。場所の制約を逆手にとった演出を行い大盛況のうちに幕を閉じました。

吉原和音／enoco企画部門

enocoコタツ会議 (2015年2月21日)



enocoではクリエイターの集まるパーティーを定期的で開催していますが、今回はいつもと趣向を変え、「コタツ会議」と題した場を設けてみました。まだ寒さの厳しい2月21日(実際のところは暖かかったのですが…)、白い展示室に16台のコタツを並べ、卓を囲んでミカンを食べつつ、もちろんお酒も飲みつつ、週末の昼からまったりと4時間、交流を暖めてもらおうというものでした。集まったクリエイターはデザイナーや建築家をはじめ、ミュージシャンや編集者、ギャラリストなど、enocoらしく多様なジャンルの方々。そこにenocoのスタッフと大阪府の行政マンが加わって、大阪のクリエイティブシーンについて、様々な情報や意見が交わされました。コタツには独特の距離感があって、通常の立食パーティーとは異なり、初めて会った人どうしても顔を近づけ、文字通り腰を落ち着けてじっくりと話すことができるという発見も。このようなパーティーから新たなネットワークが生まれたり、プロジェクトが始まったりすることを期待しつつ、今後もenocoは大阪のクリエイティブな交流拠点となることを目指して行きます。

高岡伸一／enoco企画部門

enoco×タチヨナ企画 オヤトコエノコ

《モシモ人形を作ろう!》 (2015年1月31日)

《まる、さんかく、しかくの絵本作り》 (2015年2月28日)



子どもを対象としたアートワークショップを数々手がけてきたタチヨナと共に、新しいワークショッププログラム「オヤトコエノコ」がスタートしました。「オヤトコエノコ」とは、今までにない「親と子」が互いにに関わりながら作品を作りあげていくワークショッププログラムです。1月に開催した《モシモ人形を作ろう!》では、子どもは「自分がもしも〇〇だったら」と想像して「自分とは似ているけれど、どこかちょっと違う自分」である《モシモ人形》を作り、親は子どもが作る《モシモ人形》の性格などをワークシートに沿って子どもにヒアリング、人形のキャラクターを形成し、最後のプレゼンタイムで《モシモ人形》をお披露目しました。2月に開催した《まる、さんかく、しかくの絵本作り》では、丸・三角・四角のシール(最小様々なサイズ、各サイズ4色)を使い、登場人物を二人設定して絵本を作りました。登場人物は自分自身と、一緒にワークショップにきた家族。シールでページを構成したら、親子で絵本を交換をして物語を作り、最後にみんなの前で発表しました。この「オヤトコエノコ」ワークショップの特色は、親は子どものサポートに付くのではなく、同じワークでも別々に取り組み、そして改めて共有し、一つの作品を完成させるところにあります。

今回の参加者からは「親子で別作業することで子どもの考えていることが見えておもしろかった」「子どもの、やっぱり、という面と、ちょっと意外、という面がみれてよかった」「親と子ども双方に意味があったと思う。いつもは「子のため」のワークショップが多いので」などの感想を聞くことができました。近年、子どもを対象としたアートワークショップは多くの場所で開催されています。この「オヤトコエノコ」では、そうしたワークショップを子どもだけが体験するのではなく、普段生活を共にしている親(保護者)と共に体験することで、その場限りの完結したものではなく、日常に持ち帰り、その体験がその後の生活の中に生きる〈何か〉になればと考えています。また、その場で出会う親どうし、子どもどうしがプログラムを通じて、現状あるコミュニティとはまた違った関係を結びきっかけとなることも目指しています。子どもを対象としたアートワークショップの新たな形として、今後も「オヤトコエノコ」プログラムを開催していく予定です。どうぞお楽しみに。

高橋真理子／enoco企画部門



enoco のひとびと



春になると購買意欲が高まるのか、あるいは春眠晚を覚えずで判断力が低下してるのか、仕事しながらつついCDやら書籍やらをポチっとなやってしまいます。特に中古盤や古書はいけません。「この出会いを逃したら」ってつい。来月の請求が怖いです。[チーフディレクター 高岡伸一]



4月に育児休暇から本格復帰しました。これまで出産は最大の創造だと思っていましたが、今は産むよりも育てることの方がずっとクリエイティブだと思直しています…。早いものでenocoも4年目。がむしゃらに育ててきた場をさらに魅力的な場にするべく、色々と試行錯誤していきたいと思います。(育児も…！) [プログラムディレクター 高坂玲子]



enocoでは昨年度、大阪府立精神医療センターに新しく美術作品を展示しました。その試みが、院内で働かれている方や患者様にご好評いただき「ぐっじょぶ賞」を受賞しました！院内環境の向上に絵画作品が一役かえたこと嬉しいニュースです。こらからの収蔵品の展示にご注目ください！ [アートコーディネーター 福元葉子]

enocolumn 05

童詩雑誌「きりん」について

(1948-1962)

enocoに関わる創造人たちによるコラム。
大阪府文化課主任研究員を務めた中塚さん、
お願いします。

この江之子島センターから眼と鼻の先、西区本田町に、かつて浮田要三と星芳郎の二人が編集と発行をする日本童詩研究会があり、そこから童詩と童画の雑誌「きりん」が発行されていた。
最初は梅田の尾崎書房で発行されていたが、廃業により浮田と星が後を引き継いで、浮田の実家の敷地内で発行を継続することになった。
この発行所については、思想の科学7号(1954.11)掲載の足立巻一の文章に詳しい。足立の記述によれば、「二坪のバラックでトタンぶき、電球交換所の裏庭に建てられており、板壁で物置小屋よりも貧相で、内部も板敷きだった」という。

1948年に発行された「きりん」の表紙の1, 2号は脇田和であったが、3, 4号を、浮田は吉原治良に依

頼、油彩画「縄とびをする少女」(6号)が提供された。この作品をみた浮田は「絶品であった。一瞬凍りつく思いでした。最上級の情熱がこめられていた。」述べている。

これをきっかけに、浮田と吉原治良、関西の画家たちは、児童画を共通項とした関係が深まってゆく。「具体」の機関紙第1号は、浮田要三から印刷機を借りて製作されたという。

「きりん」の表紙は、吉原以外にも、伊藤継郎、須田剋太、山崎隆夫、小磯良平、井上寛造、東貞美、田中敦子、白髪一雄、山崎つる子、元永定正ら、具体の作家たちががけており、1955年に浮田は「具体」の会員となる。

「きりん」とその表紙については、2008年7月に「きりんの絵本」として発行されており、浮田要三、加藤瑞穂、倉科勇三が編集執筆をしているので、そちらを参照していただきたい。

中塚宏行

大阪府文化課主任研究員

なかつかひろゆき

1954年大阪府生まれ。大阪大学文学部美学科(美術史専攻)卒業。1977年～92年北海道立美術館(札幌、旭川、函館)の学芸員、学芸課長を経て、1992年～2015年大阪府文化課、現代美術センター、大阪府都市魅力局文化課主任研究員(美術統括)を経て現在、文化・スポーツ課専門員。美術評論家連盟、民族芸術学会会員。論文「オブジェと記号」(1977)、著作集「美術ノ漂流」学芸員Nの30年(2007)、展覧会「描かれた文字ノ書かれた絵」(1989)、「金光松美展」(1998)、「上前智祐展」(1999)、「眼と心とかたち」(2015)ほか

アートが難民を救う

ここ数年、僕の関心はアジアに向いている。日常におけるアートの重要性を、ヨーロッパの街やフェスティバルに学び、街の活性化の視点に取り入れてきたが、同じアジア人でありながら、あまりにアジアのアート事情を知らないことに愕然とした。そして、アジアのパフォーミングアートをもちと日本を始め、欧米にも紹介したいと思い始めた。Asian Performing Art Marketの日本開催を密かに企み、調整に入っている。先月、ベトナム、カンボジアの弾丸視察の旅を敢行した。今回は、カンボジアのPhare Ponleu Selpak(ファー・ボンルー・セルパク。通称PPS。芸術の栄光という意味)について話してみようと思う。

それは1986年にタイ国境の難民キャンプで始まった。難民だった青少年に芸術・芸能の表現によって戦争のトラウマ(心の傷)の癒しを与えたいという思いからだそう。最初は簡単なお絵かき教室から始まり、そのアイデアが継続され、多くの難民が故郷のバタンバンに戻っ



てからも発展していった。そして正式にPPSが1994年に発足、現在は、幼稚園から教育をサポートし、サーカス、音楽、演劇、クメール舞踊などを教育するパフォーミングアーツ学科、グラフィックス、アニメーション、ビジュアルアートを専門とするビジュアルデザイン工芸学科もある。授業料や教科書、文具なども無料で支給される。多くの若者がここから育ち、仕事を得ている。バタンバンには常設のサーカステントがあり、僕は「SOKHA」を見た。伝統音楽生演奏を取り入れたこの演目は、内戦で全てを失ったソカールの物語をアクロバットで演じられた。350人の観客は総立ちで、拍手は鳴り止まなかった。

大阪府 20 世紀美術コレクション

1974年から2007年にかけて大阪府が収集した「大阪府20世紀コレクション」。総数およそ7800点の中からenocoスタッフが選ぶ今号の「この一点」は…



銅版画小品構成(3点組)

「時計と女」前田藤四郎(1904-1990)

1930年制作|銅板、紙|サイズ8.4cm×10.5cm

今回ご紹介するのは、モダニズムの空気ただよう大阪で創作版画の先駆者として活躍した前田藤四郎の作品、銅版画小品構成(3点組)の内の一点「時計と女」です。広告印刷会社「青雲社」でグラフィックデザイナーをつとめていた彼はその職能をいかし、多くの斬新な手法に取り組みました。そのうちのひとつが、外国の商品の見本帳の中から気に入ったイメージを切り取り貼り合わせた原画を元にエッチングで表現した手法です。

このシリーズでは、時計や水煙草などの精密なデザインと美女の対比が描かれています。人形のように描かれた女性に対して巨大化された時計は、首、肩、腰を連想させるようなフォルムを持ち擬人化されています。まるで二人の人物が、ポーズをとっているかのような画面構成です。

この作品は85年前に制作されたものですが、視覚要素だけでなく技術面も含めて、新しいことに向けて突き進むという当時の前田のハイカラ魂のようなものを感じることがができるのではないのでしょうか？

福元葉子

enoco企画部門

オン★ザ★レビュー

enoco地下1階の古書店、オン・ザ・ブックス
米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・オカルトまで、多彩なラインナップの中から、今の気分をあらわす1冊をご紹介します。



路地裏の京都

甲斐 扶佐義 著

1970年代から京都の路地裏ばかりを撮り続けてきた著者による渾身の一冊です。全編モノクロで撮られて情緒感たっぷり。玄関先のトークに花を咲かせるおばあちゃん、ガン飛ばしてくる野良猫、行水で暑さをしのぐ子供たち、芸妓さんの姿なんかは京都ならではのいいですね～路地裏。その町の「顔」が見えてきます。enocoが所在している西区にも路地裏がけっこうありまして、特に九条周辺の路地裏は最高にイケてるのでおすすめです。ちなみに僕の中で路地裏といえばヤンキーの溜まり場。ピーバップハイスクール全盛期の中学生時代、凶悪なやつに追いかけて、ちびるほど恐ろしい思いをしました。今となってはいい思い出です。路地裏、光と影があるのもまた一興…かな？

ON THE BOOKS

営業時間:11:00-20:00(月曜日定休)
掲載の書籍は店頭・オンラインストアで販売中 www.on-the-books.info

米田 雅明

オン・ザ・ブックス店長



enocoではシェアオフィス入居者&ホームページ広告バナー随時募集中！



えのこじまアート&ライフ

えのこじまの「れきし」

江之子島は、かつては港として栄えた大阪の中心でした。この土地の歴史について、enocoチーフディレクターで建築家、「BMC(ビルマニアカフェ)」メンバーでもある高岡さんに聞きました。

高岡伸一
enoco



—— 地名に「島」と付いていますが、どう見ても陸地のように思えます…。

高岡 「水都大阪」といわれるように、かつて大阪の都心部、特に西区には何本もの堀川が流れていました。江之子島は木津川と百間堀川とに挟まれた、中之島を小さくしたような中洲だったんです。木津川は現在もそのままですが、戦後になって東側に流れていた百間堀川が埋め立てられ、いわゆる島ではなくなりました。大阪では「島」という文字のつく地名をよく見かけますが、江之子島と同じくもともと島だったところも非常に多いんです。

—— 江之子島が大阪の行政の中心だった時代もあったと聞きます。

高岡 1874(明治7)年、今のenocoのすぐ北側に、西洋の古典様式に倣った重厚な大阪府庁舎が建てられ、あまりの立派さから江之子島「政府」と呼ばれて名所となりました。大阪市庁舎も最初は江之子島に設けられています。木津川の対岸には、外国人の暮らす川口居留地があり、新しい文化の発信地でもありました。

—— enocoの建物は、もともとどのようなものなんですか？

高岡 enocoの建物は、大手前に大阪府庁が移転したあと設けられた大阪府工業奨励館の附属棟として、1938(昭和13)年に建てられたものです。元の府庁舎は戦争の空襲で残念ながら焼失してしまったのですが、残ったこの建物は、大阪における数少ない戦前期のモダニズム建築として貴重な存在です。かつてはこの一帯が大阪の中心であったように、今度はenocoから、新しい文化やまちづくりの動きが生まれるようにしたいですね。

enocoのある大阪市西区江之子島では、アートやデザインのちからで、くらしをより楽しむための文化活動「DECOBOCO(デコボコ)」が行われています。

歴史写真提供:大阪府立産業技術総合研究所



島だった頃の江之子島周辺(1952年)。
enocoになった工業会館がみえる。



「江之子島政府」と呼ばれた立派な大阪府庁舎。



大阪府工業奨励館となった元府庁舎の内部。



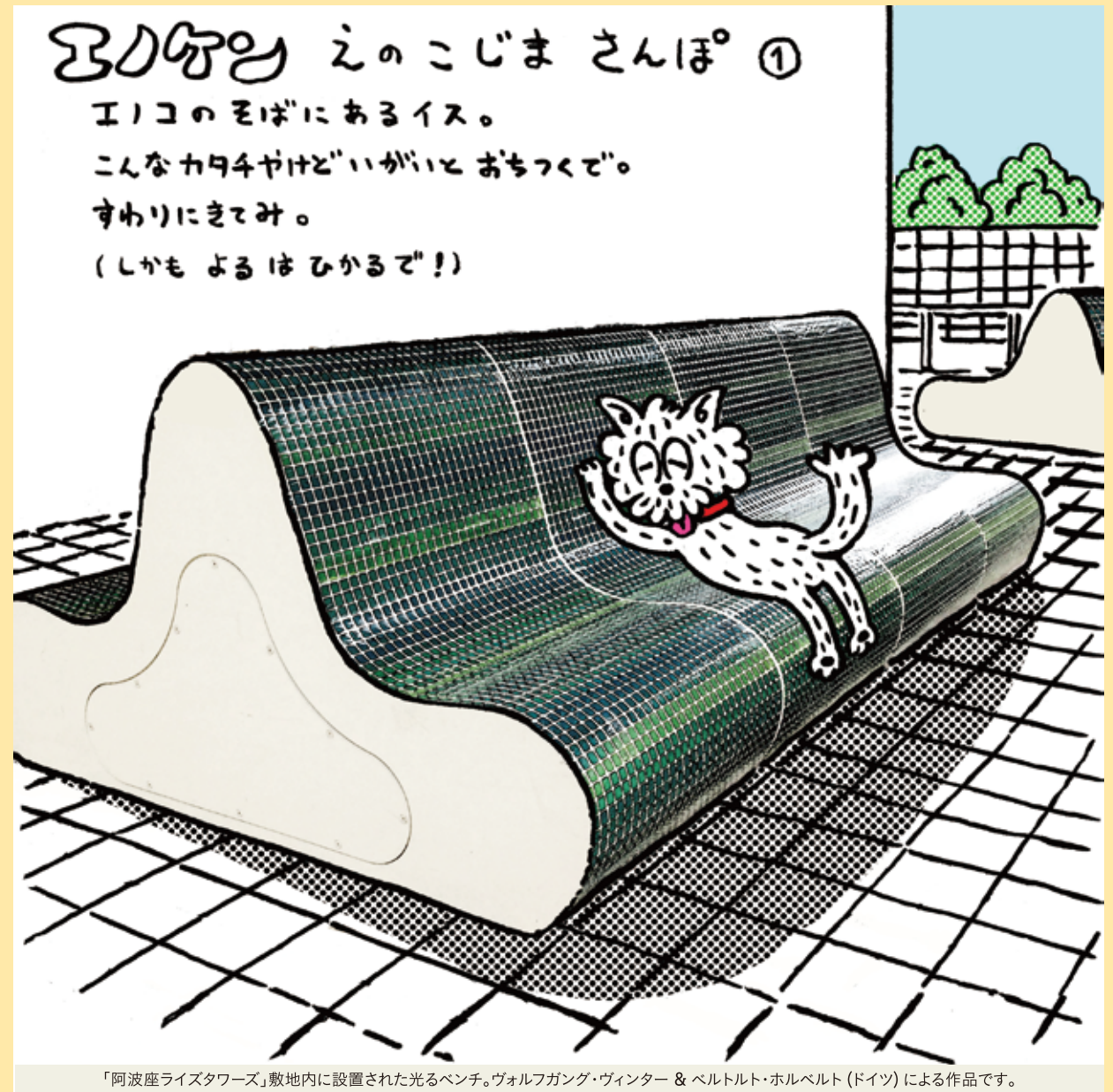
近代建築を改修して2012年にオープンしたenoco。



「DECOBOCO(デコボコ/凸凹)」という名前の“ウラ文化芸術創造センター”を江之子島で運営しています。江之子島を創造的にぎわいあふれる場所にできればいいなと、イベントや集まりを実施しています。ぜひみなさんにも積極的に関わっていただければ。[DECOBOCOディレクター後藤哲也]



江之子島では、主に「2020」という会を運営しています。東京オリンピックが開催される2020年をひとつのターニングポイントとして、日本の文化行政を考える勉強会です。勉強会といってもくだけたものですので、ぜひご参加ください。[DECOBOCO スタッフ宮本典子]



「阿波座ライズタワーズ」敷地内に設置された光るベンチ。ヴォルフガング・ヴィンター & ベルトルト・ホルベルト(ドイツ)による作品です。

イベント情報

DECOBOCOでは、enocoのとなりのマンション1階の「マークスタジオ」で、月1〜2回トークイベントを開催中。これからアート、デザインのシーン、そして文化行政がどうなっていくかをみんなで考える「2020」と、いきなり質問コーナーからスタートする「問(とい)」という学びの場イベントを実施中です。

4月には、東京・荻窪「六次元」のナカムラクニオさんをゲストに迎えた「問1」と、ドイツの写真作家、オリバー・ジーバーさんとカティア・ストウーケさんを迎えた「2020」を実施しました。5月・6月には、「創造都市」の研究で知られる、同志社大学教授の佐々木雅幸さん、そしてフランスのグラフィックデザイナー兼タイポグラファーのアンドレ・バルディンガーさんを迎えたイベントを予定しています。

くわしくはDECOBOCOのサイトをチェック! <http://bocode.co/>



「問1」
ゲスト:ナカムラクニオ(六次元)
4月5日(日)15:00-18:00
会場:マークスタジオ



「2020」
ゲスト:オリバー・ジーバー、
カティア・ストウーケ(写真家)
4月16日(木)19:00-21:00
会場:マークスタジオ